

「金子剛作品展～故郷に帰る、故郷へ還す～」ギャラリートーク

期日：令和4年10月30日(日)

場所：エイブル3階 研修室

講師：金子 剛さん

金子剛と教え子たち

おはようございます。たくさんの方に来ていただきありがとうございます。

今日は、自分のことももちろん話しますが「僕は、なんと教え子に恵まれて、なんといい先生に恵まれたか」という話をさせていただきます。

床の間コーナーで3期に分けて、約40点の作品を並べる予定ですが、それと同時に、新聞の切り抜きや賞状なども展示させていただきます。教え子の平江君が、僕のアトリエをひっくり返して色々見つけてくれたんですね。また、おふくろ(母)が筆筒の中に、僕



▲ 講師 金子 剛さん



▲ 東光賞の賞状(昭和37年受賞)

が子どもの頃の新聞の切り抜きや賞状をしまっておいてくれたんですよ。おふくろが亡くなった時に、義姉が筆筒の中から見つけてくれました。これにはびっくりしました。たくさん切り抜きや、東光賞の森田茂先生の手書きの賞状。和紙に、文化勲章をもらわれた森田先生の直筆ですので、とても貴重なもの。私はそれを大事だと思わなくて、ほったらかしていました。今回は、それも展示させていただきました。

私は、小学校5年生の時に初めて絵で賞をもらいました。西日本新聞社がスケッチ会を開いて、その時に納富進先生が審査委員長でした。この時の賞状もおふくろがとっていたんですよ。

私の絵は、そこがスタートなんです。スケッチ会に参加して納富先生からいちばん良い賞をもらって、夢のような気持ちになって。勉強も好きではない、スポーツもたいたことのない僕が、絵を好きになったのはこのおかげです。

納富先生から「あなた方の息子は何番目かな、あれは？絵の上手いのがおるよ」と言われた、と言っておふくろが喜んで帰ってきました。そして、新しいシャツを買ってもらって、おふくろと一緒に納富先生の家に行ったのが、記憶に残っています。おふくろが連れて行ってくれたのがきっかけで、絵が好きになったんですね。

私の最初の恩師は光武岱造先生です。鹿島で産婦人科の医者をしておられて、その先生が僕を最初に見つけてくれました。鹿島に「アメリカパン」という会社がありますが、私はそこで、お米の配達のアパートをしていました。光武先生の家で、米櫃に米を移していたら、後ろから襟首掴まれて「お前、何をしている！」って怒られたんですよ。「米の配達です」って答えましたけど。それ以来、話すようになって「学校は？」「美術の大学に今年入りました」と。「それなら、すぐ絵を持ってきて見せなさい」と言われて、自画像を持っていったら、500円貰ったんですよ。当時のアルバイトが1日働いて200円貰えばよかったのかな？

それから次々に絵を持っていったんですが、光武先生は「お前の絵は、どこも温かい感じがする。いいよ。このまま頑張れ」と。本当にありがたい言葉をかけてもらいました。僕の恩師の中でも、いつまで経っても「ありがとうございます」と言わざるを得ません。

高校に就職してから、光武先生の勧めで近所の人たちに絵を教えることになりました。実家の2階に元気な青年たちが集まってにぎやかでした。



▲ 「K教室」の風景

結婚をしまして。実家の近くに部屋を借りたんですが、今度はそこで、毎週土曜日に「K教室」という絵画教室を始めました。「金子」と「絵画」と「鹿島」を合わせて「K」です。この名前も光武先生が付けてくれました。最初に杉光くんや乗田くんや下村康二くんたちが集まって、そして、たくさんの若者たちが来ました。それから、おじさんやおばさんたちも。その中に、人間国宝になった鈴木滋人さんもいました。そういう素晴らしいたくさんの人たちが「K教室」の5年間で来てくれて、鈴木照次先生や納富進先生や岩永京吉先生や光武先生はご意見番でした。と

ときには、みんなでお酒を飲んで、とても素晴らしい鹿島のスタートをさせていただきました。

そして、子供が1人生まれて、佐賀市に移ります。鹿島で「鹿島美術人協会」を作りましたが、杉光定くんたちが立派に跡を継いでやってくれているから、安心して佐賀に出かけていきました。

私が、嬉野商業高校（現 嬉野高等学校）に勤務していたとき、嬉野や武雄で、また素晴らしい人たちに出会いました。陶芸家の田中一晃さんや松尾重利さん、中島宏さん。それから小野琥山さんも素晴らしい焼物の作家でしたけど「金子さん、絵画教室を開いてみんなに教えてくれんね」と言われて、町の人たちを集めて絵画教室をしました。鹿島は鹿島で「K教室」をしながら、欲張って。

嬉野商業高校では、美術部を作ったんですよ。それと、私は美術の教師ですが、保健体育も2年間教えました。嬉野商業は素晴らしい生徒がいっぱいいました。私は、人に恵まれるっていうか「周りが、神さまが、ちゃんと集めてくださったなあ」って思うぐらい人様に恵まれていると思います。

そして、小城高校に転勤するまで、嬉野で「火色グループ」というグループを作りました。

焼き物の素晴らしい作家に出会って一緒に展覧会をする。そうすると、そこに写真家や書道家も来る。嬉野の人がいっぱい集まってきて、火色、火の色というグループを作りまして、10年ぐらい続きました。佐賀の画廊にも進出して、みんなで展覧会をして、その頃、嬉野の存在がかなり認められたような気がし

ております。

嬉野商業高校に森誠治という教頭先生がおられました。国語の先生で、僕の描いた初入選の日展の絵を見て、歌を十首作ってくださいました。そして、光武先生と同じように「あんたの絵は、家庭の温かさのある絵で、私は好きだよ」と言ってもらって、ものすごく嬉しかったです。

1972年(昭和47年)、嬉野商業高校から小城高校に転勤しました。そこには、同じ東光会に出品している兵動健吾先生という素晴らしい先生がおられました。小城高校には14年間お世話になりましたが、私の宝物たちが100人近くいます。美術部の生徒だけでも100人以上卒業させましたから。

そして、平江くんがいなかったらできていなかったと思うんですけど、まずは「黄美会」という美術部の卒業生の会ができたんです。ものすごく盛んに活動してくれる、毎年展覧会をして今年がもう46回かな。続いているんですね。

今日も教え子たちが来てくれているようですが、小城高校には個性豊かな子たちがいて、そういう教え子たちがものすごく僕を育ててくれたと思います。「もうちょっと頑張ったら、東京芸大も合格するけど……」と思うような、そういう子たちもたくさんいて、14年間、ずっと悩みながら進んだんですけど。



▲『セーヌ川』(小城高校勤務時代の作品)



▲ 小城高校勤務時代の写真

もうひとつね。美術の授業をしていると「この子、本当に絵が上手なんだけど、なんとか美術部に入らんかな」と思うような子がいっぱいいるわけですよ。そして、授業が終わってから「美術部に来ないか？」って誘うんですね。でも「なんで俺が美術部!？」っていう感じですね。「俺はバスケットボール部のスターだ!」と思っているから。岡本猛くんって、今、日展の審査員をしているのがいます。今日、私の手伝いをしてくれていますけど。彼はバスケットボール部員でした。2年生の時にえらく良い絵を描くから「美術部に来たら、お前、ひよっとしたら美術で飯が食えるぞ(美術で生活していけるぞ)」って誘ったんですよ。「イヤ、美術部はイヤ」って泣きながら来たんですよ、美術部に。

卒業前に美術部で記念撮影をしたんですが、男子は顔に落書きをして撮影しました、美術部らしく。その中で「なんで、こんなことをするんだ!」と怒ったような顔で写っているのが、今、日展の審査員をしている岡本くんです。小城高校には、特別に才能のある子がいっぱいいたんですよ。だから私は「小城高校は、原石の山じゃないかな」っていつも言っていました。まさに平江くんなんかは、原石中の原石で。そういう教え子たちを見つける楽しみがいっぱいあったのが小城高校です。

そんな小城高校から、今度は佐賀北高校に転勤しました。

私が転勤したときは、1 学年 13 クラスありましたが、学級を減らすということになって、今まで使っていた教室を何に使うか、という話が始まりました。

私は「芸術コースを作りたい!」とすぐ手を挙げました。当時は、東京芸術大学に子どもたちを合格させたいという気持ちが強かったんですね。「実技の時間が部活動だけではダメだ。もうちょっと授業で教えないとダメだ」と思っていました。9 クラス教室が空くから、芸術コースを作りたいと。先生が百人以上いたんですけど、賛成してくれたのは数人でした。2 年目には「よし、何とかしよう」と考えたんですよ。当時は、定期試験で午後の時間が空いたときに、先生の親睦会みたいにして、バレーボールとかしていたんですね。そこで「文化的なこともしよう」って言って、絵を描かせたら、十数人集まりました。そこで「展覧会をしようか」って、職員展を始めたのが私です。それから、私の考えに賛成してくれる先生たちが増えて、芸術コースができました。

「芸術コースは、数学や英語や国語の取得単位を減らして、芸術の授業を増やす」と言ったら、職員会議で先生たちからいろいろ言われました。でも、芸術コースを作りました。自分の信念みたいなのがあったんですよ。

芸術コースを作ったら、やっぱり芸術大学に合格させなかったですね。それで、今日は、芸大に入っていた子どもたちのことを少し話させてもらいますね。



今や世界的に有名なミヤザキケンスケくん。世界中に絵を描いて回っています。彼は、2017 年に国連の機関と共同でウクライナに大きな壁画を描いているんですよ。実はその壁画が、爆撃で無くなってしまったらしいです。彼はそれにもめげず、今も世界中に絵を描いて回っています。ケンスケくんは、芸術コースの 7 回生です。

僕は 10 回生まで卒業させて退職しました。

▲ ウクライナでのミヤザキケンスケさん

私は、鹿島高校に入学して岩永京吉という先生に出会いました。美術室に岩永先生が描かれた「ブルータス」が貼ってあったんですよ。木炭で描かれたデッサンでした。その時にものすごく感動したのは、木炭で描いてあるのに真っ白い石工像が描いてあるんですね。

意味がわかりますか? 黒で描いてるのに、真っ白なのよ。そのデッサンが、今でも頭から離れないんですよ。というのは、僕もそういうデッサンに近づきたくて、木炭や鉛筆という黒で描くんだけど、白が出ない。白が出ないとダメなんですよ。

この絵を見てください。これ「牛骨」っていうんですが、真っ白くなった牛の頭をモチーフにして絵を描く勉強をするんですよ。

佐賀北高校芸術コース 1 回生に真島充由という生徒がいて、3 年生の時、担任しました。11 月の県展に絵を出品して、落ちました。

ある日、夜の 11 時ぐらいに学校のガードマンさんから電話がかかってきました。「生徒が美術室でまだ絵を描いていて、帰らない。いくら言っても帰らないから来てください。」と。行ったら、真島くんが描いていま



▲真島さん制作「牛骨」

した。「牛骨」を描いてたんですよ。もう嬉しくてね。「お前、素晴らしいデッサンができていぞ」って。リンゴも存在感あるし、この「牛骨の白」がね、岩永先生の「ブルータスの白」と重なったんですよ。僕がいくら頑張っても岩永先生のような白が出ない。しかし、真島くんは描いたね。夜の11時過ぎまで夢中になってデッサンしていた。それで、家まで送る車の中で「芸大を受けろ」って言いました。「1発では合格しないから芸大だけじゃいかん。多摩美も、武蔵美も受験しろ」と。

結局、一浪して河合塾（予備校）に行ったんですよ。そして、翌年、芸大に合格した。60倍近い倍率だったと思います。試験は、モデルを2日間で10時間かけて描くんですよ。5時間、5時間で。それで仕上げた絵なんですけど、それをそっくりそのまま予備校に戻って描かされるんですね。その絵が河合塾のポスターになったんです。全国の予備校ですから、全国に配られる。ポスターには、「芸大合格者作品」としか書いていない。名前が書いてないから、うちに40枚ばかり送ってもらって、全部「真島充由 佐賀北高」ってマジックで書いて、駅や店なんかには貼りました。後輩たち（高校生）も大喜びでした。夜中まで絵を描いていた真島くん、第1回卒業生です。



▲真島さんの作品を説明中

そして、2回生に池田学くんがいます。今、世界中に有名になって、絵を描いていますね。佐賀県立美術館にも『誕生』という絵が入っていますけども。

彼は、現役合格ではありませんでしたが「学くんには、可能性を感じるから！」とお父さんお母さんに話して、予備校にやってもらいました。そして、1次試験の鉛筆デッサンが終わった時点で電話がかかってきて「先生、俺、もう上がったと思う。今年は」って。2次試験のあとも「やっぱり俺、上がったと思うよ、先生」って。私は「芸大は、簡単に上がる所じゃない」と言いましたよ。そして「もし合格したら、私のいちばん上等な背広をあげる」という約束をしました。結果は、合格でした。合格したんですよ。

受験をする年のお正月、学くんはうちに来ませんでした。もちろん、浪人中ですから遊ぶ時間はありませんけどね。ところが、1月1日に電話がかかってきたんですよ。「池田学です」「今、どこに居るか？」「先生、今、東京芸大に来とる」って。1月1日ですから、芸大の入口の門は閉まっているはずですが。「2月に試験に合格するように芸大にお参りに来た。神社に参るよりも芸大が良かろう」って。遊び半分のようにも見えますが、合格したんですよ。学くんは、妙な何かを持っている男です。



▲ 池田さんからの年賀状

学くんは、大学に入った年から12年間、毎年、年賀状を送ってくれました。十二支を、私の顔で表現してくれましてね。どの顔も僕の顔にそっくりなんですよ。私を見ないで、どうして描けるのかは不思議なんですけども、1枚描くのに、1週間ぐらいかかるようです。その年賀状は今、私の宝物になっています。

そして、もう1人、話したいのが 辻孝行くん。3回生ですが、東京芸大に現役で合格しました。

その当時、県の教育委員会から頼まれて、韓国の中高生との交流をしていたんですね。それで、岡本先生と韓国に行って帰ってきたら、校長室にすぐ呼ばれました。「夜から朝まで、ずっと教室で絵を描いている生徒がいた」と。「僕のクラスですね？」って。「そうです」と。教室で「誰か？」と聞いたら、辻くんが「僕です」と出てきた。もう、叱られると分かっている、描いた絵をどっさり持ってきたんですよ。自分の手とか足を描いていましたよ。芸大だけ受験するから「合格するように、デッサンを一生懸命勉強した」と。

私は、校長先生や教頭先生たちから「夜中に描かせないように。そんな教育はいかん！」と厳しく言われたんですが、辻くんの絵を見た瞬間、ガーンとやられました。「もう、参った！」と思ったんです。「よし、これなら 芸大上がるぞ。辻、芸大上がるぞ」って。

その二日後、他の男の子たちも一緒に徹夜合宿をしたんですけど、夜中の2時ぐらいからみんな寝始めました。でも、辻くんだけは描いていました。朝は、美術準備室でご飯を炊いてみんなに食べさせました。



▲ 辻さんの絵を説明中の金子さん

そして「職員朝礼に行くから、描くのをやめろ」と言ったら「先生。あと1枚、これを仕上げるまで待って」って言って、30分間で自分の手を描きました。

これですよ(左写真)。思わず「この絵を俺にくれないか」って言ったら「先生、貰ってくれると？本当に？」って言ったんですよ。その言葉が、私はもう嬉しくてね。その時「ああ、生徒とつながったな」と思ってね。そして、辻くんは現役で芸大に合格しました。

また、私は高校を退職してから12年間、佐賀短期大学のエルダーカレッジで美術史の講義をしました。毎週1回でしたが、その時の教え子たちが、今日も来てくれているようです。一緒にフランスに行って、美術館巡りもしました。

私は、なぜか生徒さんに恵まれる。それが本当に私の絵の支えになっています。私は、教え子たちに恵まれて、そういう教え子たちの話もまだまだたくさんあります。金子剛は絵描きですけど、教員としての一面もちょっと知ってほしくて、今日はこういう話をさせていただきました。絵の話は、また機会があるときにいくらでもしますね。



▲ 『雪の天山』金子剛さん制作

もう少し、時間があるようですから話を続けますが、私は、教え子もさることながら、友達や先輩、同僚に恵まれました。その中で、今日は、二人の話をしようと思います。

一人目は、貞松光男先生の話です。貞松先生は、鹿島高校の4年先輩です。私が小城高校にいるとき

に、ひょっこり来られて「あんた、鹿島高校の後輩らしいね。俺は、そこの農業試験場の場長をしている貞松という。俺のこと知っとる？」って。「すいません。知りません」って言ったんですが、それから「貞松先生無くしての私の人生は無い」くらいの付き合いになりました。貞松先生と一緒に佐賀県の山という山を歩きました。山に生えている植物のことは何でも知っていて、食べ方まで教えてもらいました。まさに博学の先生でした。

そして、朝日新聞や佐賀新聞に植物に関する文章を書かれていました。佐賀新聞には、1996年から1年間、2008年から3年間、佐賀の植物の話が連載されました。それに、挿絵を描かせてもらったんですね。合計したら250枚以上になります。

週1回の掲載に合わせて、貞松先生が決めた植物を描きます。写真じゃなくて、その植物が生えているところに連れて行かれるわけです、道無き道を通ってね。はじめは貞松先生の運転だったんですが、後から私が運転するようになって、ジープを買いました。山の中に行くにはジープが必要だったんですよ。

そうして、毎週、山の中に連れて行かれて、絵を描きました。今では、本当に勉強になったなあと思います。もう、こんなチャンスは無いです。



貞松先生と出会ったおかげで、佐賀新聞から、冊子を2冊出させてもらいました。『ふるさと植物誌』と『方言で味わう佐賀の植物』という本です。

貞松先生の著書はたくさんありますが、その中でも、私と一緒に本を作るのは「楽しかった」と言ってもらいました。

貞松先生は、植物標本もたくさん作られたんですね。その標本と私が描いた絵と一緒に佐賀県立宇宙科学館に寄贈して、保存をしてもらいました。

▲ 佐賀新聞から出版された書籍

そして、もう一人、私の大切な同級生、池田（中野）尚弘君の話をさせてください。

尚ちゃんは、鹿島高校から福岡大学に行って、八幡製鉄所に入って、全日本の男子バレーボール選手に選ばれた人です。東京オリンピックで銅メダル、次のメキシコでは銀メダル。そして、ミュンヘンオリンピックでは逆転で金メダルを取りました。その後、全日本男子バレーボールの監督、総監督までして、オリンピックで大活躍した男です。

実は令和3年1月に亡くなりました。尚ちゃんとは学生の頃からなぜか馬が合って、尚ちゃんが帰省した時には「元気にしとったか？」と言いつつですね。尚ちゃんが亡くなってから、佐賀新聞にちょっとだけ彼のことを書かせてもらいました。



▲ ギャラリートーク風景

佐賀県は今、「サンライズパーク」を作っていますよね。そこには、スポーツに貢献した佐賀県出身者

のコーナーができるとか。日本代表として5回もオリンピックに出場した「池田（中野）尚弘くん」を顕彰するコーナーを創設してもらいたい。それをお願いしに、県庁へ行くことにしています。必ず実現してもらおうつもりです。

今まで話したように、私は恩師や生徒や同級生、また、いろんな活動の中で繋がった人たちにもものすごく助けられてきました。大学に合格したという電話をたくさんの生徒からもらって、一緒に喜ぶことも、とても誇りに思います。

今日は、故郷の鹿島で話すということで、同級生もいっぱい来てくれていますが「83歳にまでなって、騒動させて申し訳ない」と思っています。でも、会えてとっても嬉しいです。

本当にありがとうございました。

では、今日はこのへんで終わりにしようと思います。ありがとうございました。